

白飯とふりかけだった 自炊初日の晩ご飯

浦島太郎。「4年間の大学生活を一言で例えてみる」と言われたら、そんなふうに答えると思う。

目の前のやらなければいけないことに追われ、毎日忙しく過ごしていた。右も左も分からない1年次は、おいしいお店やお薦めの授業など、あらゆることを教えていただいた。サークルはテニス。アルバイトも始めた。

1人暮らしの自炊生活。最初の晩ご飯は「白飯+ふりかけ」だったのが懐かしい。

2年次はFLPゼミ。「最もつらい」と言われているゼミに所属し、つらさゆえに毎日、身を粉にして動き回っていた。

3年次はゼミナール。学生はみんな、できるやつばかりで、グループでの討論はいつも胃がきりきりする思いだった。

4年次は就職活動。マスコミを目指し、OB訪問や面接・筆記対策、できることはすべてやり切った。

4年間、いつもくっつくた、だった。忙殺された日々も、こうして振り返ってみると充実していて、楽しいことばかり。今は卒業誌面作りなんかしている。

大学生活で最も印象的な心に残る思い出は何だろうか。思い当たることがあり過ぎて一つに絞るのが難しい。

ずっと憧れていたバイクを手に入れた。先輩から譲り受けたのだ。ところが、エンジン以外は故障ばかりで、そのまま乗ることはできない。かといって、すべてを修理してもらおうほどの大金はない。

そこで、整備士さんに教えてもらいながら、さびを落とし、油を差し、オイルを変えたり、塗装したり…。節約のため自分の手で修復していった。

何も考えずにこなしていた授業も、今ではかけがえのなかったもののように思える。午前9時20分に始まる1時限の授業に、同9時に起きて向かったこともある。アパートから大学まで10分のところに住んでいたの、何とか間に合ったが、2年次・火曜日1時限の英語の教室は6号館7階、何度も遅刻した。

こんなことを言っては親に怒られそうだが、学問に対して特別高い志があったわけではない。いつも一緒に授業を受けている友達3人組に会いたいから毎日出

席していた。

複雑な授業内容に目をこすりながら、ひたすらノートをとる。テスト期間しか行かなかったが、図書館から見る景色も大好きだった。何気なく見ていたものが、こんなにかけがえのないものに感じるとは思わなかった。

愛校心が強くなったのには、学生記者の活動も大きく関係している。多くの方とお会いして、話をする機会をいただいた。中央大学には、各ジャンルに優れた人がいて、皆さんそれぞれ魅力的だった。

中大は、求める人には多様なチャンスを与えてくれる。中大生というだけで、「おいしい思い」をしてきた。

テニス世界ランク5位の錦織圭選手に会えたり、アニメーション映画『君の名は。』で知られる中大OB、新海誠監督の話の聞いたり。滅多にない機会には飛び付いた。

後輩たちにも、ぜひ、学校に溢れている好機をつかんでほしい。そして「中大生でよかった」と思える学生生活を送ってほしい。

何一つ不自由なく、中大に通わせてくれた両親にお礼を言いたい。ありがとうございました。

冒頭で「私にとって大学生活を一言で例えると浦島太郎だった」と書いた。諸説あるが、浦島太郎は玉手箱を開けた後、鶴となって仙人の住むという蓬莱山へ行き、仙界の一員になったという話もある。

この原稿が広報誌に掲載され、私の手元に来る頃は卒業式を終えて学生と社会人の間にいることだろう。私も次の目標に向けて、飛び立っていきたい。

苦楽を共にした
オートバイ

